アブドル・バハの聖典に見える、ダイナミック(動的）なシステムである学問を理解するに当たって

フォアド・カテライ

<概要>

この論文は、伝統的な学問方法の限界を指摘したものである。その限界は、特に伝統的な学問をアブドル・バハの聖典に見えるダイナミックで、相対的な学問方法に照らす時より明らかになる。伝統的な学問の唱導者、たとえ彼等が知識を重んじるグノーシス派であろうが、経験論者、理性論者、あるいは、現代の最先端を行く学者であろうが、自分の学問方法の狭さと排他的な態度によって真実が見えなくなっている。一方、アブドル・バハの聖典には、経験論者が好む観察や、理性論者が使うような論理的な推論と帰納法、現代の学者が好む蓄積された知識が組み合わされ、「何々がある」ーつまり、現実　ー　を論述してから、その上に、グノーシス派の規準となっている質問ー「何があるべきか？」　ー　に答えている。こうして、四つの学問の要素の相互関係を明らかにすることによって、アブドル・バハはダイナミックで、進化的で、非常に複雑な知的体系を創造された。学問は無限に進化するシステムなので、境界は常に変わる。これを認めるなら、学者は謙虚な気持ちで、学問の本質を検討し、話し合う必要を感じるはずである。そうすれば更に、人間の本質の検討の必要も感じることになると思われる。